

令和4年度

印西市民アカデミーだより

第17号

講座 17：本埜・白鳥の郷

1月13日（金）、白鳥の郷を見学する前に本埜支所の数百メートル東側にある笠神社

（かさがみしゃ）と蘆波鷹神社（そばたかじんしゃ）を見学しました。この二社があるところは、戦国時代後半、千葉氏重臣原氏の笠神城跡エリアにあります。笠神社の祭神は国常立神（クニトコタチノカミ）の娘の下照姫。蘆波鷹神社の祭神は、高御産巢日神（タカミスビノカミ）と神産巢日神（カミスビノカミ）。どちらの祭神も日本をつくった神様である伊邪那岐命（イザナギノミコト）と伊邪那美命（イザナミノミコト）よりも先に出現した神々です。どういう経緯で祀られたのか大変興味深いところです。もう一つ興味深いのは、どちらの境内にも庚申塔が数多く建てられていることです。笠神社には、高さ45～60cm前後の画一的な駒型庚申塔が境内の左右に並んでいます。慶應元年～三年（1865～1867）の3年間の年銘を持つ典型的な多石百庚申で、青面金剛像塔17基、「庚申塔」銘の文字塔78基のほか、破損した廃石塔5基があり、合わせて100基が建てられています。さらに、5基の単独で建てられた庚申塔もある。蘆波鷹神社には、駒型の「庚申塔」銘の文字塔54基と、青面金剛像塔6基の計60基が建てられています。百庚申には40基足りないが60という数は干支の一周の数でもあり、また狭い境内に合わせた数であったと推測されています。造立時期は、明治16年（1883）に8基、明治33年（1900）に19基、昭和10年（1935）に33基で、建立に三次にわたって52年間かかっており、近代に入って笠神地区の三世代の人々により造塔が継続されたことは他に類を見ません。



神事オビシヤで使われた的



標高17mほどの独立した台地にある笠神城跡



笠神社の百庚申（青面金剛像塔）

360度見渡す限り田圃の中にある白鳥の郷。水を張った田圃の中は餌を待つ白鳥たちで溢れかえっていました。この日は、いつもより白鳥たちが帰ってくるのが早く、アカデミー生の到着後すぐに給餌タイムとなりました。目の前でみる白鳥は大きく、羽を広げると大人が手を広げた大きさくらいあります。この白鳥の郷を管理・運営している本埜白鳥を守る会は、公共機関からの補助や援助を受けず、全員がボランティアで早朝から日没まで毎日活動しています。1992年に6羽の白鳥が舞い降りたことから始まった白鳥の保護活動。年々飛来数が増え、2012年には1300羽を超える白鳥がやってきました。印西市の豊かな自然を象徴する場所です。



白鳥に給餌する本埜白鳥を守る会の出山会長